

ちは、「女性の仕事」であるソーイングを習得することでその役割をより高度に達成できると考えていた。一方、若い女性たちはソーイングをすることで、両親を中心とした「アイガ」に対する責任を果たそうとしていた。概して家計の補助という意識にもこのような役割観から影響を受けているので、女性たちがソーイングプログラムに「参加」する理由の背景には「ファアサモア」による行動規範が大きく関連しているといえる。

サモア女性の「参加」の現実と現在の開発パラダイムにおいて語られるより望ましい女性「参加」のあり方を比較してみると、上述した3つの点全てにおいて相違が観察された。そして、サモアという地域のコンテキストに基づいて考察されたサモア女性の「参加」は、「開発」における「参加」が複雑であること、それゆえに「参加」が「オルタナティブな発展」を提示していく可能性を有していることを示していた。

以上より、「開発」において「参加」の概念が「オルタナティブな発展」として構築されていくためには、発展途上国におけるダイナミックな“地域性”を明らかにすること、そして、それを開発理論や実践の場にフィードバックしていく方法を模索していくことが必要であるといえる。

■ 卒業論文要旨 ■

愛媛県南予地方の鹿踊： 伝統芸能と生きる人々

栗田 文

愛媛県南部、南予地方に伝わる伝統芸能「鹿踊」の現状を、関係者からの聞き取りや祭礼での観察から記録した。また、地域住民と伝統芸能の関係を考察し、その問題点やそれに対する試みを調査した。鹿踊は、江戸時代に伊達氏が仙台から宇和島に転封された時、伝えられ、変化した。また、南予各地でも伝播した結果、様々なバリエーションが見られる。本研究では、宇和島市裡町の八つ鹿踊、城川町遊子谷の七つ鹿踊、長浜町櫛生の五

つ鹿踊、城辺町緑の五つ鹿踊、御荘町貝塚の五つ鹿踊というコントラストがはっきりした五つの鹿踊を詳細に調査した。その結果、地域性、人々の思い、伝承の困難さと各地の試みを検証できた。伝統芸能が容易に消滅すること、伝承・保存の困難さ、後世に伝えようとする人々の熱い思い、人々の自信と誇りが良くわかった。

喜連川町の温泉分譲住宅地開発と地域社会：定住者の生活史からの考察

佐藤 真紀子

栃木県喜連川町では、地域活性化のため、「フィオーレ喜連川」という温泉分譲住宅地が開発された。転入者の大部分は、首都圏からである。新世代のニュータウンということだったが、その多くは、老夫婦が定年後のセカンドライフを送る住宅地となっている。過疎化を食い止めたものの、高齢化の歯止めとはなっていない。一方、定住ではなく、別荘として購入した人々もいる。また、市街地から離れているため、旧来のコミュニティとのつながりはない。多様な価値観を持つ人々が、この新しい地域社会を形成している。地域社会の特徴を考えるため、定住者8世帯にインテンシブなインタビューを試み、各世帯の生活史を詳しく検討した。その結果、ここに移住した背景や理由が明らかになった。老夫婦は、リゾート的な環境に魅力を感じ、移住してきた。若年夫婦は、交通の便が悪くないので、通勤など地理的な要因で移住してきた。単身者は、自然環境の魅力に引かれ、移住してきた。

高松市丸亀町商店街におけるファッション品店の展開と活性化について

永井 摩衣子

高松市中心部は7つの商店街から成っている。三越百貨店に近い、北部の丸亀商店街はミセス向け、南のである商店街ほどヤング向けと、以前は、

ファッションタウンの住み分けがあった。最近では、丸亀町はミセス向けの婦人服店だけでなく、キャリアウーマン層、ヤング層に対応したブランドショップが増えており、この商店街を活気づけている。商店の数こそ多くないものの、婦人服専門店のレパートリーとしてはバランスが良い地区である。ファッションタウンとしては、圧倒的に婦人服店が多く、子供服、紳士服を扱う店は少ない。一方、高松市郊外には次々と大型ショッピングモールができ、市街地には新しい大丸百貨店やファッションビルが次々と開店し、ファッション品店の商業環境が変化している。そこで、丸亀町商店街では、第三セクターの「丸亀町まちづくり会社」により、新しい展開を図ろうとしている。いかに他の商店街との差別化を図るかがポイントとなる。ブランド構成、空間づくりなど、新しい価値観を提供する場所としての街づくりが求められている。

タウン誌から読み取れる自由が丘イメージ

濱中 薫

情報メディアにより創り出された地域イメージを、地元の人達はどのように受け止めているのか、また、地域イメージを今後、どのように変えたいのかを、東京都目黒区自由が丘をフィールドに検証した。まず、タウン誌のバックナンバーを内容分析した。同時に、関連資料の検討や聞き取りでの裏付けを試みた。かつて農村だったこの地域は、関東大震災後、高級住宅地となり、戦後はお洒落なショッピングタウンと変化した。戦後、自由が丘商店街振興組合が発行するタウン誌の形式は、電話帳から、読み物が中心に、さらにはガイドブックへと変化した。組合が提唱するイメージと社会的なイメージには若干のズレがある。組合が定着させたいイメージは、「若者の街」ではなく、「家族で楽しめる街」である。また、「雑貨の街」「インポートブランドの発信地」という商業重視の傾向も見られる。そして、将来の自由が丘のテーマは「パリ」イメージづくりである。

盛り場の変遷史的復原： 水郷潮来を事例として

前島 裕美

盛り場は、時代・社会・地域の顔である。このことを、茨城県行方郡潮来町浜一丁目をフィールドに、文献や聞き取り調査によって明らかにした。地域に相応しい時代設定を行い、盛り場の復原地図を作成し、当時の雰囲気を実証・記述した。そして、それぞれの時代の、盛り場と周辺地域の関連を考察した。利根川水運が盛んだった近世～近代前半については先行研究が多い。だが、大正～現代については、先行研究がほとんどない。資料があまりないため、聞き取りを中心に作業を行った。具体的には、大正時代、昭和初期、戦中・戦後期、高度経済成長（開発）期、現在の5つの時代区分を設定した。その結果、盛り場と世相・地域の密接な関係を実証した。大都市の盛り場に関する研究は多いが、潮来クラスの地方都市については、研究がほとんどなく、その意味でも意義がある。

里山とその保全活動について

伊藤 ゆう子

里山とは近年、その保全活動と共に急速に広まってきた言葉である。人里近くにある農用林、薪炭林のことを指すのだが、その使用される範囲は広い。里山は主に、広葉樹を中心とした雑木によって構成されているが、その植生は地域によって様々である。また里山は近年、市民の憩いの場として、多種多様な生物の棲み家として、その価値が見直されつつある。しかしその保全活動には、土地の所有権をめぐる問題や、今後の方向性などの問題もつきまとう。里山保全活動を行うグループは現在数多く存在するが、ほとんどはボランティアの市民グループや行政が興したグループ、その中間のグループである。活動内容として、下草刈り、落ち葉掻きなどの雑木林の手入れはほと